

# 体験学習ワークショップ

## 箱庭療法

### - 体験学習と理論の枠組み -

谷口文章（甲南大学）

#### 1. 箱庭体験

セラピーはカウンセラーや分析家自身の手法体験がなければ、実感をともなってクライアントや被験者に共感できないであろう。ロジャースのいう共感的理解の意味は、まさにそのことを表現していよう。

砂の感触、作品を自然と作れる時とそうでない時、どうしても使ってみたいオモチャと使いたくないもの、完成した作品を見た時の自己確認と自己発見、完成後の爽快感や時に感じる疲労感、等々。

このワークショップでは、カウンセラーやカウンセラー希望者が、まず箱庭を体験してクライアントの気持ちを経験する。

#### 2. 箱庭療法の世界

箱庭療法は、最初D.カルフやC.G.ユングの分析心理学を適応して、遊戯療法の一つとして考案されたものであった。その場合、必要なことは、カウンセラーが箱庭を作るクライアントのそばにいて共感することである。母子一体の共有の場、つまりコスモロジーの展開の場が前提とされている。

また、ユングの自我egoと自己selfという分析関係も、言語分析を超えた三次元の箱庭を前にしてactionの入った具体的なものとして表現される。

#### 3. 箱庭療法の理論の試み

したがって箱庭の作品を理解するためには、分析的解釈ではなく、心のコスモロジーである具体的場の展開を直感する論理が最も考察されてよいであろう。単に理論的解釈にとどまるのではなく、直感的理論を検討することも無意味ではなからう。

たとえば、箱自体を人間の意識と無意識がおかれている環境、つまり意識されない前の「自我」を置いている「自己」と考え、コスモロジーの自然な動きによってその箱の世界が自己限定されることで、特殊な意識、つまりオモチャという自我意識が置かれると考えられないであろうか。つまり、箱庭の作品がつくられる時、そのつどの無意識（セルフ）から現れ出た、意識の一因であるオモチャ（エゴ）がコスモロジーをつくっていくと仮定するのである。

こうして、今回のワークショップでは、まず箱庭の世界の体験学習とともに、ある程度の直感的理論の仮説も参加者とともに考えていきたい。

2000年度 第15回 日本保健医療行動科学学会大会 プログラム・要旨集より  
主催：保健医療行動科学学会



---

[\[RETURN\]](#)